レヴァント鉄器時代の鉢形土器に見る アッシリアの影響について

Considering the Neo-Assyrian Influence on Ceramic Bowls from the Iron Age Levant

足立拓朗^{*}
ADACHI Takurou

ABSTRACT The aim of this paper is to examine how the expansion of Neo-Assyrian Empire had influenced the local material culture in the Levant from the 9th to 7th century B.C. The case study consists of 4 types of ceramic bowls: carinated bowls with everted rim, shallow bowls with sharp carination, bar-handled bowls and loop-handled bowls. The distribution of carinated bowls with everted rim and shallow bowls with sharp carination type 1 can be seen in Northern Mesopotamia. The distribution of shallow bowls with sharp carination type 2, bar-handled bowls and loop-handled bowls can be seen in the Levant. Their distribution patterns and their classifications reveal that the Neo-Assyrian Empire did not give a strong influence to local pottery assemblages. Based on the analysis, the only important Assyrian sites in the Levant had carinated bowls with everted rim. Tell Mastuma, which is one of the Iron Age II sites in the northwestern part of Syria, is located on the way of the Assyrian expansion to west. The bowls unearthed from Tell Mastuma should be designated as a part of the Levantine material cultures.

I. はじめに

前9～7世紀のレヴァント地方（シリア・パレスチナ）には多くの小国家が乱立し、多様な物質文化が育まれた。だが、それらの小国家は徐々にアッシリアに征服されていった。その過程で物質文化はいかに変容していったのだろうか。それを分析することにより、アッシリアがどのように広域国家として成立していったのかを明らかにしていきたい。しかし、その目的を達成するために、鉄器時代の多様な物質文化全般を検証することは困難であり、また個別の物質文化の研究も進んではいない。

本稿では鉄器時代物質文化の個別研究の一つとして、レヴァントと北メソポタミアにおける鉢形土器の分類と分布による分析をおこなう。併せて、(財) 古代オリエント博物

^{*} 中近東文化センター
Middle Eastern Culture Center in Japan

館が調査したマストゥーマ (Mastuma) 遺跡の性質について、本稿による鉢形土器の分析から考察する。この2点から前9～7世紀のレヴァントと北メソポタミアの物質文化の一端を明らかにし、レヴァント地方におけるアッシリアの影響について考えてみたい。マストゥーマはシリア北西部に位置し、アッシリアのレヴァント侵攻の際の進路上に位置している。そのため、アッシリアの征服の影響を何らかの形で被ったと考えられる。

II. 分析対象の鉢形土器

前9～7世紀のレヴァント地方には様々な土器群が存在していた。この地方の土器研究はアミラン (R. Amiran) によってまとめられており、近年リーマン (G. Lehmann) によってシリア地域の土器編年研究も行われている。また、マストゥーマ資料を中心とした和田久彦⁽³⁾、斎藤信弘⁽⁴⁾の北シリアにおける搬入土器を中心とした研究、四角隆二⁽⁵⁾によるレヴァント地方におけるケルノス形土器 (Kernos) の研究、筆者の坏形土器⁽⁶⁾の研究等がおこなわれており、日本においても近年活発な研究対象となりつつある。この時期の北メソポタミアの土器群については、オーツ (J. Oates) とリネス (J. Lines) によってまとめられている⁽⁷⁾。最近はカーティス (J. Curtis) らの発掘調査によって新資料が追加されつつある⁽⁸⁾。また大津忠彦はアッシリアの典型的な土器群の一つであるパレス・ウエア (Pallace Ware) ⁽⁹⁾の分布を明らかにした。

本稿では北メソポタミアとパレスチナにその分布の中心を有すると考えられる鉢形土器4種類を抽出して分析の対象とする。当然、これら4種類の他にも各種の鉢形土器が存在するのであるが、レヴァント地方へのアッシリアの拡大状況を捉えることができる鉢形土器としてこれら4種類を選択した。その理由をそれぞれの器形について述べる。その後、それらの分布を明らかにし、考察の材料としたい。

2-1. 口縁外屈鉢 (Carinated Bowls with Everted Rim) (第1図)

この器形は、リネスによってニムルード (Nimrud) 出土の後期アッシリアの鉢形土器の一つとして認定され、その時期はサルゴンII世の治世までは遡ると示唆された⁽¹⁰⁾。比較的高めで「ハ」の字状に開く高台を有し、口縁部は外屈し、口縁部直下がくびれてから胴部へいたる。そのため、肩部のような屈曲部、つまり竜骨部 (Carination) を有する。この器形の土器はリネスによって後期アッシリアの鉢形土器の最も一般的なものであると示唆された⁽¹¹⁾。オーツはフォート・シャルマネセル (Fort Shalmaneser) ⁽¹²⁾における分析でも、この器形が最も一般的であると述べている。この器形の土器は後期アッシリアにおける特徴的な物質文化の一つとみなすことができ、そのためアッシリアの征服地においても使用された可能性が強いと仮定できる。

第1図 口縁外屈鉢 (Carinated Bowls with everted Rim)

第2図 胴部屈曲浅鉢 (Shallow Bowls with Sharp Carination)

2-2. 胴部屈曲浅鉢 (Shallow Bowls with Sharp Carination) (第2図)

上記の口縁外屈鉢と同じように、オーツに後期アッシリアの鉢形土器の一器形として認定され、特に前7世紀に属すると示唆されている⁽¹³⁾。リーマンはこの器形を含む土器群をアッセンブリッジ4 (Assemblage 4) と命名し、その時期を前650-580年としている⁽¹⁴⁾。

器高は比較的低く、皿状を呈し、胴部に明確な屈曲部を有することが特徴である。口縁部は外傾して直線的、あるいはわずかに外反して立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。この器形の土器は後期アッシリアの特徴を示すとともに、シリア北西部に位置するマストゥーマでも出土しており、その分布の意味が注目に値すると判断して分析対象とした。マストゥーマでの出土はアッシリアの影響をこの遺跡の土器文化が被ったことを示しているのだろうか。

2-3. 棒状把手付鉢 (Bar-Handled Bowls) (第3図)

この器形はアミランによって、鉄器時代 IIA-B 期 (前1000-800年頃) から現れ、鉄器時代 IIC 期 (前800-587年頃) まで続いていると分析されている⁽¹⁵⁾。アミランの集成は北部すなわちイスラエル王国にこの器形が分布していることを示している⁽¹⁶⁾。低めの高台を有し、器高も比較的低い。口縁部は直立するものが一般的で、口唇部は丸みを帯びた方形で作られている。

アミランは金属器を模倣した土器の研究が、この器形の土器の起源を探る上で必要であると示唆している⁽¹⁷⁾ので、この器形の土器の起源が金属器にあると想定していたようである。

この器形の土器はマストゥーマでは報告例はないが、同じく北西シリアに位置するアブ・ダンネ (Abou Danné)、アフイス (Afis) で出土している。主にパレスチナに分布すると考えられるこのタイプの土器は、北西シリアでも発見されている。さらに北メソポタミアにもこの器形が分布しているのかを検討する必要があるだろう。

2-4. ループ状把手付鉢 (Loop-Handled Bowls) (第4図)

棒状把手付鉢と同じくアミランによって集成されており、鉄器時代 IIC 期に位置づけられ、南パレスチナに分布していると示唆されている⁽¹⁸⁾。低めの高台を有するものと、無高台のものがあ、胴部は半球状を呈する。口唇部からループ状の把手が垂直方向に1対あるいは2対付けられる。マストゥーマからもこの器形の土器が出土している。アミランの集成で示されているように、この器形の土器が南パレスチナに分布するのか、また、マストゥーマ出土の同種の土器とはパレスチナとどのような関係にあるのかを分析する。

第3図 棒状把手付鉢 (Bar-Handled Bowls)

第4図 ループ状把手付鉢 (Roop-Handled Bowls)

III. 鉢形土器の分布

本稿で分析対象とした4器形は二つのグループに分けられる。すなわち、北メソポタミアにその分布の中心があり、アッシリアに属すると考えられる口縁外屈鉢と胴部屈曲浅鉢のグループと、パレスチナに分布の中心がある棒状把手付鉢とループ状把手付鉢のグループである。これらの土器群が地理的にその中間に位置するシリア地方でどのような分布を示すのか、またその分布がどのように変遷するのかを中心に分析していく。

3-1. 口縁外屈鉢の分布と分類 (第1図)

口縁外屈鉢は、アッシリアの中心地であるニムルド、フォート・シャルマネセルで出土しており、前8～7世紀頃に属すると考えられる(第1図1, 3)⁽¹⁹⁾。この2遺跡よりチグリス河を遡ったカスリジ・クリフ(Qasrij Cliff)、キルベト・カスリジ(Khirbet Qasrij)、キルベト・カツニエ(Khirbet Khatuniyeh)、スウェイジ(Thuwajj)でも出土しており、(第1図2, 5)、スウェイジ以外は前7世紀後半以降と⁽²⁰⁾考えられる。

アッシュール(Assur)ではこの器形の土器が甕棺の蓋として利用されており(第1図4)、同じく甕棺の蓋として利用された鉢形土器がハブール河左岸のタバン(Taban)でも発見されている(第1図8)⁽²¹⁾。ただ両者の器形は口縁部の作りが異なっており、タバン出土資料のほうがやや法量大きい。タバンの対岸に位置するクネイデジ(Kneidej)では底部が平底状を呈する口縁外屈鉢が出土しているが、このタイプの底部を有する口縁外屈鉢はリマー(Rimah)の中期アッシリア期からも出土している。⁽²²⁾リマーの後期アッシリア期からは高台を持つ口縁外屈鉢が出土していることから、平底状の口縁外屈鉢が先に出現していたと考えられる。

口縁外屈鉢は口縁の外屈が強いタイプ(1類)(第1図1～3)と弱いタイプ(2類)(第1図4, 5)、口縁部が外屈というよりむしろ外折し、くびれや肩部(竜骨部: Carination)が見られないタイプ(3類)⁽²³⁾(第1図6～8)に分類できる。2類は前7世紀後半以降の遺跡で検出例が多く、1・3類は前7世紀後半以降と⁽²⁴⁾考えられる遺跡からは検出例が少ない。

さて、この口縁外屈鉢の北メソポタミア以外での出土例であるが、まずシリアではアフィスから2類が出土している。⁽²⁴⁾パレスチナにおいてはドル(Dor)において3類が出土している(第1図6)⁽²⁵⁾。パレスチナでは、イエルサレム(Jerusalem)、マザール(Mazar)で同様な鉢形土器が見つかった。イエルサレムの資料は底部が丸みを帯びるという類似性は認められるものの、口縁部の外屈は弱く、また肩部の張りも明瞭でない、2類の形態に近い資料と言えるが、時期が前8世紀頃とやや古くなる。マザールの資料は形態は似ているが平底を呈しており、北メソポタミアの口縁外屈鉢とは異なる。北東シリアのハラフ(Halaf)の資料は小型であり、底部が平底状を呈することからクネイデジや

第 5 図 レヴァント地方鉢形土器分布図

第6図 北メソポタミア地方鉢形土器分布図

リマー出土資料に似ている。イエルサレム、マザール、ハラフの資料は真性の口縁外屈鉢とは言えないが何らかの影響を受けた土器群である可能性がある。

口縁外屈鉢の分布はシリアではアフィス、パレスチナではドルで例外的に出土例が認められるが、分布の中心はあくまで北メソポタミアである（第5・6図）。

3-2. 胴部屈曲浅鉢の分布と分類（第2図）

胴部屈曲浅鉢は口縁部がやや外反して立ち上がるタイプ（1類）（第2図1, 2）と直線的に外傾して立ち上がるタイプ（2類）（第2図3～10）に分けられる。1類は北メソポタミアに分布し、2類は北東シリアからパレスチナに分布している（第5・6図）。管見によれば、2類には前10世紀後半まで遡る資料が存在しているが、1類は前9世紀に属する資料さえ確認できない。この結果は、北メソポタミアに前9～8世紀の調査遺跡が少ないことに原因がある。そのため、2類が1類に先行するかどうか、あるいは両者が何らかの系統関係を有するかどうかは明確にはしえない。全く異なる系統関係を有している可能性もある。

3-3. 棒状把手付鉢の分布と分類

アミランは棒状把手付鉢が、棒状把手の短いタイプと長いタイプに分けられる可能性を示唆した。⁽²⁶⁾ 棒状把手の両端には膨らみが見られ、全体としては横に長い「H」字状を

呈する。中には中央部も若干膨らんでいるものもある。棒状把手が付けられている位置は口唇部直下である場合と口唇部から少し下である場合がある。

これらの特徴を総合すると、把手の長さが短く、中央部に膨らみを持ち、口唇部直下に付けられるタイプ（1類）（第3図1～6）と把手が長く、中央部に膨らみを持たず、口唇部よりやや下に付けられるタイプ（2類）（第3図7～14）に分類できる。

1類は前10～8世紀に属しており、2類は前8世紀に属しているようだ。ただ、ケイサン（Keisan）の資料は把手は短く、中央に膨らみを有するという1類の特徴を有するが、把手は口唇部直下に付けられてはいない（第3図6）。またアシュドド（Ashdod）の資料は把手は短く、口唇部直下に付けられているが、中央部には膨らみがない（第3図4）。ケイサンとアシュドドの資料は1類としては例外的なものに位置づけられ、分類上は矛盾している言えよう。時期的には両者とも、前10～8世紀に含まれている。現時点では、1類から2類へ棒状把手付鉢が型式変化していくものと仮定し、ケイサンとアシュドドの資料は1類から2類への中間形態として理解し、1類の範疇に入れておく。

1類の分布は、南パレスチナのベールシェバ（Beersheba）、エル・ファルア（南）（El-Far'ah(S)）、ラキシシュ（Lachish）を中心とする。2類になるとサマリア（Samaria）、エル・ファルア（北）、ハツォール（Hazor）、メギド（Megiddo）等の北パレスチナに分布が広がる。2類は北西シリアのアフィス、アブ・ダンネでも出土している（第3図14）。また北メソポタミアのフォート・シャルマネセルでも出土している（第3図11）。この資料とサマリアの資料（第3図12）の棒状把手は棒状把手端部の膨らみの内側にもう一つ膨らみを有する特殊なタイプである。

北メソポタミアでは、フォート・シャルマネセルしか出土例を探し出すことが出来なかったが、北メソポタミアで1例だけというのは、特殊な分布状況であり、今後さらに検討していかなければならない。ただ北メソポタミアに分布する棒状把手付鉢が非常にすくないことは指摘できるだろう。

3-4. ループ状把手付鉢の分類と分布

ループ状把手付鉢には、器高の高いタイプ（1類）（第4図1～6）と低いタイプ（2類）（第4図7～10）に分類が可能である。1類については鉄器時代Ⅰ期に遡る類例も存在する。前9～8世紀においてはシリアからパレスチナの広い範囲に分布する。北メソポタミアには分布は及ばないであろう。

1類は、いわゆる「クラテル」形土器との区別が明確ではない。元来ギリシア陶器の器種名称である「クラテル」を西アジアの土器群に明確に対応させることは困難である。アミランの分類で鉢としているものと「クラテル」としているものには、ほぼ同じ器形が見られ、若干混乱しているようだ。⁽²⁷⁾本稿では、把手を有する鉢の中で、器高が口径よ

り大きいものを「クラテル」として認定し、今回の分類から差し引いている。⁽²⁸⁾

ループ状把手付鉢は、口唇部が内傾するタイプが北西シリアで出土していることや(第4図4, 5), 口縁部や胴部がやや角張った形状を呈するタイプが北パレスチナで出土している(第4図7, 8)といった特徴を挙げることができる。しかし1・2類の間には、分布上の差異、あるいは時期的な差異は確認できない。また、アミランの集成では、南パレスチナの資料が多く使用されていたため、この器形が南パレスチナで多く分布するという印象があったが、北パレスチナでも出土例は多く、北西シリアまでは分布が及んでいることを指摘したい。⁽²⁹⁾

IV. 摘 要

鉢形土器の四つの器形に注目し、それらの分類・分布を分析した。その結果は以下のようによまとめられる。

- ① 外屈口縁鉢は1～3類に細分される。1類は前8～7世紀前半頃に属し、その分布は北メソポタミアに限定される。2類は前7世紀後半以降も残り、その分布は北メソポタミアを中心に北西シリアに及ぶ。3類は前8～7世紀前半頃に属し、分布は北メソポタミアを中心とし、パレスチナではドルにのみ検出例がある。
- ② 胴部屈曲浅鉢は1・2類に細分され、1類は北メソポタミアに分布し、2類はレヴァントを中心に一部北メソポタミアにも分布する。1類は前8～7世紀以降の検出例しかないが、2類は前10世紀後半に遡る。
- ③ 棒状把手付鉢は1・2類に細分され、1類は前10～8世紀に南パレスチナを中心に分布し、2類は前8～7世紀にパレスチナを中心に、シリアにも分布が及ぶ。北メソポタミアにもわずかに及んでいる。
- ④ ループ状把手付鉢は1・2類に細分できるが、両者とも分布はレヴァントであり、時期は前9～8世紀に属する。

V. 考 察

前9～7世紀の北メソポタミア、シリア、パレスチナの鉢形土器の分布・分類は第7図のように図示される。この図はあくまで模式図であるので、それぞれの鉢形土器の時期については、上記の概要をご覧の上、実際には重なり合っていることをご了解いただきたい。

本稿によって分析した4器形の鉢形土器は分布の偏りは見られるものの、北メソポタミア、シリア、パレスチナにわたって分布していたり、最低でもシリアとパレスチナあるいはシリアと北メソポタミアというようにある程度広い範囲に分布していることがわ

	南パレスチナ	北パレスチナ	シリア	北イラク
前900	Beersheba Lachish	Keisan Samaria ループ状把手付鉢		
前800	Lachish 棒状把手付鉢 Ashdod	Samaria Hazor Hazor 胴部屈曲浅鉢	Mastuma Abou Danne Mastuma	Assyria Assur
前700	el-Far'ah(N) Jerusalem	Dor Zeror	Taban 口縁外屈鉢	Assur Nimrud Khirbet Qasrij
前600	Goren			

第7図 鉢形土器編年模式図

かった。つまり、本稿で分析した鉢形土器はこの時期に存在した複数の小国家の枠を越えて分布していることになる。

筆者は鉄器時代の物質文化について、坯形土器や石製容器を対象として検討してきたが、その結論もこの時期のレヴァント地方の小国家群に共通する物質文化が認められる、ということであった。⁽³⁰⁾この物質文化の同一性はアッシリアによるレヴァント地方の征服以前に既に認められる。なぜこの同一性が認められるのかが、大きな課題として残っていた。そして本稿における鉢形土器の分析でも、この同一性が認められるという結果がえられたわけである。次に4器形についてそれぞれ考察していきたい。

まず、直接アッシリアの侵攻を表す物質文化として口縁外屈鉢に注目して、集成・分析した。その結果、シリア、パレスチナでは散発的にしか分布しないことが明らかになった。パレスチナのドルではフォート・シャルマネセル出土資料とほぼ同形態の資料が存在しており、ドルがアッシリアの拠点都市として機能していたことを裏付ける。また、同じく口縁外屈鉢が検出されたアフィスは古代名ハズラクであり、この地域の拠点的な都市である。イェルサレムなどでも同様な鉢形土器は検出されてるものの、北メソポタミアで見られる口縁外屈鉢とは異なる。何らかの影響を受けている可能性を考えて、第7図に図示した。これらの土器の解釈については今後の課題としたい。

口縁外屈鉢は北メソポタミアでは、典型的な後期アッシリア時代の土器群の一つであるが、アッシリアの進行に伴い、レヴァント地方（シリア・パレスチナ）へその使用が及んではいる。しかしレヴァント地方の分布は散発的なものに限定され、シリアではアフィス、パレスチナではドルといったアッシリアにとって拠点的な遺跡でしか検出されていない。アッシリア人が直接居住した遺跡にのみ搬入、あるいは現地で製作されたのであろう。

後期アッシリアの物質文化として、もう一つ胴部屈曲浅鉢に注目して、集成・分析したが、北メソポタミアとレヴァントでは、形態が異なること、またレヴァントの方が定期的に遡る資料が検出された。そのため、胴部屈曲浅鉢はアッシリアの拡大に伴って、レヴァントで広がった物質文化でないであろう。

このように、後期アッシリアの典型的な土器である口縁外屈鉢・胴部屈曲浅鉢は前9～7世紀におけるアッシリアの拡大に伴って、北メソポタミアからレヴァントに分布が広がるということはない。ただユーフラテス河畔のティル・バルシップまでは前856年以降アッシリアの支配が及んでおり、その後レヴァント侵攻の拠点となる場所であったのだから、北東シリアまでは典型的な後期アッシリアの鉢形土器である口縁外屈鉢が分布しているはずであろう。今後、この地域における口縁外屈鉢の出土例に対してさらに注意を払っていきたい。

パレスチナに分布の中心のある棒状把手付鉢・ループ状把手付鉢はシリアまではその分布が広がるものの、北メソポタミアへはフォート・シャルマネセルの棒状把手付鉢の類例（第3図12）が存在するだけである。このフォート・シャルマネセルの類例とサマリアの類例は、前述したとおり棒状把手の形態が他と若干異なるため、今後細分できる可能性がある。このやや形状の異なる棒状把手付鉢のみがアッシリアに属する可能性があると考えておきたい。

アッシリアの影響が表面化してきた前9世紀頃には棒状把手付鉢・ループ状把手付鉢はレヴァントに分布していた。この二つの鉢形土器はレヴァント地方固有の物質文化として、複数の国家間にまたがって使用されていた器形であると考えることができる。また北メソポタミア・シリア・パレスチナという広範囲に分布する胴部屈曲浅鉢は分析結果から判断すると、北メソポタミアに分布する1類と、レヴァントに分布する2類に明確に分かれており、胴部屈曲浅鉢2類もレヴァント地方中心の物質文化として捉えることができる。

次にマストゥーマ出土の鉢形土器について考察を加えていきたい。マストゥーマ出土の鉢形土器は胴部屈曲浅鉢2類とループ状把手付鉢であり、まさにレヴァント地方の物質文化として認識できる。近距離にあるアフィスでは口縁外屈鉢2類が検出されており、マストゥーマでも今後の土器資料の分析が進めば、より上層（時期が下った層位）でアッシリアの進入を示す口縁外屈鉢が見つかる可能性はあるが、おそらく拠点的集落ではないマストゥーマでは口縁外屈鉢は搬入あるいは現地製作されてはいないとする。現段階の分析ではマストゥーマは北西シリアのごく一般的な鉄器時代の町であるとみなすことができる。

しかし、池田裕は、マストゥーマをハマの町の一つであるアシュタマク（Astammaku）と同定する説を紹介し、カルカルの戦いの後にハマの王イルフレニ（Irhuleni）が新しい夏の王宮（new summer residence）としてアシュタマクを選んだと述べている。それに対して、和田はマストゥーマの発掘成果から、「マストゥーマは王都ではなく、オリーブ油の搾油や葡萄などの果汁、織物生産などで暮らしを立てていた町」と結論づけながら、マストゥーマにハマの国境警備をする要塞都市として機能を想定している。その根拠として、マストゥーマが計画性を持って立てられた町であり、その建築プランが要塞都市と解釈されるベールシェバとほぼ同じであることを挙げている。マストゥーマの建築プランがベールシェバに類似することは小川英雄も指摘している。本稿の主題からそれるので建築プランについて述べることは避けるが、マストゥーマが計画性を持った都市プランを有していることは事実であろう。

常木晃はマストゥーマ周辺 10km 以内に少なくとも17の鉄器時代遺跡が存在してお

り、これらの遺跡が丘陵地に立地することを示し、鉄器時代から丘陵地が果樹栽培の目的で利用され始めた⁽³⁶⁾と指摘した。この指摘を重視するとマストゥーマは果樹栽培を目的として計画的建設されたこの地域の町の一つであるとも考えられる。

マストゥーマは計画的に建設された町である可能性はあるが、和田と常木が指摘するように果樹栽培を中心とした町で、政治的あるいは軍事的な拠点とは考えにくい。このような遺跡から出土した鉢形土器の性格は、レヴァント地方に分布するタイプのものであり、アッシリアの影響は鉢形土器においては及んでいないと想像される。マストゥーマには大規模な破壊の痕跡も存在しないことから、アッシリアの侵入後も町は存続していたと推定され、⁽³⁷⁾在地の物質文化が利用され続けたと考えられる。

VI. おわりに

鉢形土器の分析結果を考察することにより、以下2点の結論を得ることができた。

- A. 胴部屈曲浅鉢2類・棒状把手付鉢・ループ状把手付鉢はレヴァント地方の小国家群が共通して有する物質文化であった。その分布は北西シリアの一般的な町であったマストゥーマにも及んでいる。
- B. 口縁外屈鉢・胴部屈曲浅鉢1類は後期アッシリアの典型的な物質文化であるが、アッシリアの拡大に伴って、その分布がレヴァント地方へ広がっていくわけではない。たとえ例外的に検出されても、それはアッシリアの拠点的な都市に限定される。

鉢形土器の一部の分析結果から得られた結論であるので、この時期の物質文化の動態の一端を表したに過ぎない。だが、カルカルの戦いの時など一時的ではあるが、反アッシリア同盟を結んでいた小国家群には共通する鉢形土器が分布していること（結論A）、それに対して、アッシリアのレヴァント制圧後にアッシリア固有の鉢形土器は限られたアッシリア人の拠点遺跡を除いて殆ど見られないこと（結論B）が指摘できる。ただ、この時期のレヴァント小国家は一枚岩ではなかったと考えられており、今後さらに分析対象を増やして、鉢形土器に検討を加えていきながら、この時期の多様な物質文化の動態の把握に努めていかなければならない。

付 記 本稿は、日本オリエント学会第41回大会における口頭発表表に加筆したものです。発表後に松本健・小口裕通・沼本宏俊（国士舘大学イラク古代文化研究所）、大津忠彦・山内和也（中近東文化センター）・西山伸一（ロンドン大学大学院）の諸氏にご助言をいただきました。感謝申し上げます。また、国士舘大学イラク古代文化研究所・中近東文化センターには文献収集の際、大変お世話になりました。感謝申し上げます。

注

- (1) R. Amiran, *Ancient Pottery of the Holy Land*, Massada Press Ltd, 1969.
- (2) G. Lehmann, "Trends in the Local Pottery Development of the Late Iron Age and Persian Period in Syria and Lebanon, ca. 700 to 300 B.C.," *Bulletin of the American School of Oriental Research* 311(1998): 7-37.
- (3) H. Wada, "Pottery Vessels in the Iron Age I in the South Area in Tell Mastuma," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 15(1994): 51-76; 和田久彦「テル・マストゥーマの現地整理」『第5回西アジア発掘調査報告会・報告集』古代オリエント博物館, 1998: 42-46.
- (4) 斎藤信弘「北シリア鉄器時代の搬入土器—Syria: Tell Mastuma の事例から—」立教大学大学院文学研究科地理学専攻博士前期課程論文, 1996.
- (5) 四角隆二「(研究ノート) いわゆるケルノス・リングについて」『青山考古』14(1997): 77-86.
- (6) 足立拓朗「レヴァント鉄器時代のキャリネイションを有する精製環形土器」『青山考古』15(1998): 67-82; T. Adachi, "The Fine Carinated Bowl in the Iron Age," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 18(1997): 41-56.
- (7) J. Lines, "Late Assyrian Pottery from Nimrud," *Iraq* 16(1954): 164-167; J. Oates, "Late Assyrian Pottery from Fort Shalmaneser," *Iraq* 21(1959): 130-146.
- (8) J. Curtis *et al.*, *Excavations at Qasrij Cliff and Khirbet Qasrij*, Trustees of the British Museum, London, 1989; J. Curtis & A. Green, *Excavations at Khirbet Khathuniyeh*, Trustees of the British Museum, London, 1997.
- (9) T. Ohtsu, "Late Assyrian 'Pallace Ware': Concerning Dimpled Goblet," *Bulletin of the Middle Eastern Culture Center in Japan* 4(1991): 131-153.
- (10) Lines, *op.cit.*: 165.
- (11) *Ibid.*
- (12) Oates, *op.cit.*: 132.
- (13) Lines, *loc.cit.*; Oates, *op.cit.*: 141.
- (14) Lehmann, *op.cit.*: 21.
- (15) Amiran, *op.cit.*: 195-206.
- (16) *Ibid.*
- (17) *Ibid.*: 201.
- (18) *Ibid.*: 205。ループ状把手付鉢を南部地域のみ掲載している。ただし、ほぼ同じ器形の「クラテル」が北部で出土していることを示している (*ibid.*: 223)。
- (19) Lines, *loc.cit.*; Oates, *op.cit.*: 147.
- (20) Curtis *et al.*, *op.cit.*: 18, 51-53; Curtis & Green, *op.cit.*: 9-13; H. Fujii *et al.*, "Preliminary Report on the Excavations at Tell Thuwail, Tell Jessary (second season), and Qasr Banat," *Sumer* 46(1989-90): 38-59.

- (21) A. Haller, *Die Gräber und Grütte von Assur*, WDOG-G 65, Berlin, 1954; K. Ohnuma *et al.*, "Excavation at Tell Taban, Hassake, Syria: Report of the 1997 Season of Work," *Al-Rafidan* (Institute for Culture Studies of Ancient Iraq, Tokyo), 20(1998): 1-21.
- (22) C. Postage *et al.*, *The Excavations at Tell al Rimah: The Pottery*, British School of Archaeology in Iraq, 1997; E. Klengel-Brandt, "Vorläufiger Bericht über die Ausgrabungen des Vorderasiatischen Ergebnisse der Kampagnen 1993 und 1994," *MDOG* 128(1996): 33-67.
- (23) オーツにより有溝折り返し口縁 (grooved folded rim) を有するタイプと分類されている (Oates, *op.cit.*: 140)。
- (24) S. M. Cecchini, "Area G. The Iron Age I-III Levels Architecture, Pottery and Finds," in S. M. Cecchini *et al.* (eds.), *Tell Afis (Syria): The 1988-1992 Evacuations on the Acropolis*, Edizioni Ets, Pisa, 1998: 273-365, Fig.35-21.
- (25) A. Gilboa, "Assyrian-Type at Dor and the Status of the Town during the Assyrian Occupation Period," *Eretz-israel* 25(1996): 92, 122-135.
- (26) Amiran, *loc.cit.*
- (27) *Ibid.*: 15-18, 19, 20.
- (28) 大津忠彦は「クラテール」を「中近東では、深い鉢あるいは壺の総称」と捉えている。大津忠彦「古代地中海沿岸地域における土器型式学—考古学的「器形」と文献史料に記された名称—」『考古学雑誌』82/4(1997): 59-77.
- (29) Amiran, *op.cit.*: 200-206.
- (30) T. Adachi, "The Fine Carinated Bowl in the Iron Age," *BAOM* 18(1997): 41-56 (52-54); 足立拓朗「レバント鉄器時代の石製容器」『オリエント』41/1(1998): 141-156 (152-154) .
- (31) Y. Ikeda, "Royal Cities and Fortified Cities," *Iraq* 41/1(1979): 75-87(79) .
- (32) *Ibid.*: 83.
- (33) 和田久彦「アシュタマクとその時代 (その1)」『オリエンテ』15 (1997): 19-23.
- (34) 上掲論文, 20頁.
- (35) 小川英雄・山本由美子『世界の歴史 4 オリエント世界の発展』中央公論社, 1997: 75.
- (36) A. Tsuneki, "3. General Survey of Tells around Tell Mastuma," in Sh. Wakita, "Tell Mastuma: A Preliminary Report of the Excavations in Idlib, Syria, 1993," *BAOM* 15(1994): 31-32.
- (37) 和田久彦「アシュタマクとその時代 (その2)」『オリエンテ』16(1997): 18-22(22) .
- (38) H. クレンゲル『古代シリアの歴史と文化 東西文化のかけ橋』五味亨訳, 六興出版, 1991: 226.

插图出典

第1-1图 Lines, *op.cit.*: Pl.XXXVII-5; 第1-2图 Curtis *et al.*, *op.cit.*: Fig.24-30; 第1-3图 Oates, *op.cit.*: Pl.XXXV-24; 第1-4图 Haller, *op.cit.*: Tafel 6-m; 第1-5图 Curtis *et al.*, *op.cit.*: Fig.8-17; 第1-6图 Gilboa, *op.cit.*: p.128, Fig.3-10; 第1-7图 Oates, *op.cit.*: Pl. XXXV-25; 第1-8图 Ohnuma, *op.cit.*: Fig.8-11; 第1-9图 I. Eshel, “Two Pottery Groups from Kenyon’s Excavations on the Eastern Slope of Ancient Jerusalem,” in I. Eshel *et al.* (eds.), *Excavations by K. M. Kenyon in Jerusalem 1961-1961*, Oxford University Press, Oxford, 1995: 1-158, Fig.14-19; 第1-10图 K. Yassine, *Tell el Mazar I Cemetary A*, University of Jordan, 1984: Fig.3-8; 第1-11图 B. Hrouda, *Tell Halaf*, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1962: Tafel 61-151; 第2-1图 Haller, *op.cit.*: Tafel 6-ag; 第2-2图 Lines, *op.cit.*: Pl.XXXVII-3; 第2-3图 W. E. Rast, *Taanach I: Studies in the Iron Age Pottery*, American Schools of Oriental Research, Cambridge, 1978: Fig.52-6; 第2-4图 Y. Aharoni, *Investigations at Lachish: The Sanctuary and the Residency (Lachish V)*, Tel Aviv University, Tel Aviv, 1975: Pl.44-1; 第2-5图 F. James, *The Iron Age at Beth Shan: A Study of Levels VI-IV*, University Museum, University of Pennsylvania: Fig.63-11; 第2-6图 Y. Yadin *et al.*, *Hazor III-IV: An Account of the Third and Fourth Season of Excavations, 1957-1958*, Hebrew University, Jerusalem, 1961: Pl.CLXXXI-1; 第2-7图 Lehmann, *op.cit.*: Fig.7-7; 第2-8图 Eshel, *op.cit.*: Fig.12-2; 第2-9图 Sh. Wakita, “Tell Mastuma: A preliminary Report of the Excavations at Idlib, Syria, in 1994 and 1995,” *BAOM* 16(1995): 1-74, Fig.7-4; 第2-10图 A. Chambon, *Tell el-Far’ah I: L’âge du Fer*, Recherche sur les civilisations, Paris, 1984: Pl.58-14; 第3-1图 Amiran, *op.cit.*: Pl.63-8; 第3-2图 Yadin *et al.*, *op.cit.*: Pl.CLXXXII-13; 第3-3图 Z. Herzog, *Beer-Sheba II: The Early Iron Age Settlements*, Tel Aviv University, Tel Aviv, 1984: Fig.26-8; 第3-4图 M. Dothan, “Ashdod II-III: The Second and Third Seasons of Excavations 1963, 1965,” *Atiqot* 4/10 (1971): Fig.52-22; 第3-5图 Yadin *et al.*, *op.cit.*: Pl.CCXIX-9; 第3-6图 J. Briend *et al.*, *Tell Keisan (1971-1976): Une cité phénicienne en Galilée*, Editions Universitaires Fribourg Sisse, Paris, 1980: Pl.53-12; 第3-7图 Yadin *et al.*, *op.cit.*: Pl. CCXXVI-12; 第3-8图 Y. Yadin, *Hazor II: An Account of the Second Season of Excavations, 1956*, Hebrew University, Jerusalem, 1960: Pl.XCVIII-27; 第3-9图 Yadin *et al.*, *op.cit.*: Pl.CCXXVI-10; 第3-10图 J. Crowfoot, *Samaria-Sebesta*, London, 1957: Fig.16-2; 第3-11图 *ibid.*: Fig.16-1; 第3-12图 Oates, *op.cit.*: Pl.XXXV-24; 第3-13图 Chambon, *op.cit.*: Pl.56-5; 第3-14图 M. Lebeau, *La Céramique de l’âge du Fer II-III à Tell Abou Danné*, Editions Recherche sur les civilisations, Paris, 1983: Pl. XIV-4; 第4-1图 Dothan, *op.cit.*: Fig.5-13; 第4-2图 Herzog, *op.cit.*: Fig.27-10; 第4-3图 Chambon, *op.cit.*: Pl.56-2; 第4-4图 P. J. Riis *et al.*, *Hama, Fouilles et Recherches 1931-1938*, II-2, Copenhagen, 1990: Fig.78-593; 第4-5图 N. Egami *et al.*, *Tell*

Mastuma Excavations in Idlib District, Syria, 1982, Ancient Orient Museum, Tokyo, 1984: Pl.6-10; 第4-6図 K. Ohata (ed.), *Tel Zeror III*, Society for Near Eastern Studies in Japan, 1970: Pl.XV-4; 第4-7図 Yadin, *op.cit.*: Pl.XCVIII-43; 第4-8図 Briend *et al.*, *op.cit.*: Pl.78-1; 第4-9図 Aharoni, *op.cit.*: Pl.41-9; 第4-10図 B. Mazar *et al.*, "En-Gedi: The First and Second Seasons of Excavations 1961-1962," *Atiqot* (Jerusalem Academic Press), 1960: Fig.16-5.